

知的障害特別支援学校中学部における 地域と協働する職業教育の研究

名古屋 恒彦*・田村 英子**・中館 崇裕**・熊谷 佳展**・岩渕 昌文**
今井 真実**・田淵 健**・巴 真希子**・中村 昭彦**・橋場 哲***

(2012年3月5日受理)

Tsunehiko NAGOYA・Eiko TAMURA・Takahiro NAKADATE

Yoshinobu KUMAGAI・Yoshihumi IWABUCHI・Mami IMAI・Ken TABUCHI

Makiko TOMOE・Akihiko NAKAMURA・Satoshi HASHIBA

A Study of a Career Education Program Collaborating with Regional Society in the Lower
Secondary Department of a Special Needs School

1 問題と目的

名古屋らは、知的障害教育における職業教育の充実に関して、高等部段階で強調されるものであり、中学部段階では低調であることを指摘し、中学部段階での職業教育の実践研究の必要性を強調している(名古屋、稲邊、田村、田淵、2008)。

この問題意識の下、名古屋らは岩手大学教育学部附属特別支援学校(以下、「附属特別支援学校」)中学部における作業学習、働く活動をテーマにした生活単元学習の実践研究を通じて、中学部段階での職業教育のあり方を検討してきた(名古屋、稲邊、田村、田淵、2008;名古屋、稲邊、田淵、大嶋、2009;名古屋、名須川、田淵、田村、岩井、2010;名古屋、名須川、中館、熊谷、岩渕、今井、田村、田淵、竹野、金丸、2011)(以下、「附属先行研究」)。この過程で、中学部においても地域社会に根ざした働く活動は、生徒主体の学習の実現、青年らしい働く姿の実現とそのため能力の育成、地域に根ざした生活の実現、持続可能な環境教育の観点から成果をあげていることを示してきた。

一方、近年、知的障害教育においても、職業教育への関心の高まりが著しく、2010年4月～2011年3月における知的障害関係雑誌においても特集記事が組まれている。教師向け雑誌として代表的な『実践障害児教育』『特別支援教育研究』それぞれで特集が組まれており、『実践障害児教育』では、「働くことを体感しよう!清掃技能検定をとおしたキャリア教育の実践」(10月号特集)、「雇用する側に聞いてきました その就労支援何が足りない?」(3月号特集)、『特別支援教育研究』では「今日をおもいきり楽しみ、明日を拓くキャリア教育」(10月号特集)がある。

いずれも斯界における職業教育への関心を反映したものとみることができる。それら3つの特集の中では、『特別支援教育研究』の当該特集において、「中学校特別支援学級と『総合的な学習の時間』でのキャリア教育」(望月、2010)が紹介されている。1本のみではあるが、キャリア教育への関心の高まりが、高等部段階のみならず、中学段階、さらには小学段階(恒川、2010)への関心の拡大を促しているとみられる。キャリア教育自体が就労のみならず、ライフステージ全般での

*岩手大学教育学部特別支援教育科、**岩手大学教育学部附属特別支援学校、***岩手県立盛岡聴覚支援学校

ライフキャリアの観点を有しているからである。

このような状況で、中学部での職業教育に着目してきた一連の附属先行研究は、いっそうその重要性を増してきていると考えられる。

名古屋らは、附属特別支援学校中学部で実践される、働く活動を中心とした生活単元学習の授業研究を通して、生徒の主体的取り組みを実現し、かつ地域の産業や専門家と連携した持続可能な開発に資する職業教育の展開方法を検討した（名古屋、名須川、中館、熊谷、岩淵、今井、田村、田淵、竹野、金丸、2011）。その結果、教師による支援的対応による主体的取り組み実現の重要性、地域の産業や専門家との連携による本格的かつ意欲的な取り組みの実現、持続可能な開発に資する職業教育の観点的な重要性を指摘した（名古屋、名須川、中館、熊谷、岩淵、今井、田村、田淵、竹野、金丸、2011）。

とりわけ、職業教育における生徒の主体的取り組み及び地域に根ざした活動の重要性は一連の附属先行研究でも繰り返し指摘されているところである。

そこで、本研究では、知的障害特別支援学校中学部における望ましい職業教育のあり方を、生徒の主体的取り組みを基盤とし、地域といっそうの協働を図る方向で検討する。附属特別支援学校中学部で実践される生活単元学習及び作業学習の授業研究を通して、生徒の主体的取り組みを実現し、かつ地域と協働していく持続可能な開発に資する職業教育の展開方法を明らかにすることを目的とする。

2 方法

本研究では、これまでの附属先行研究を継続し、以下の2つの方法を実施する。

(1) 附属特別支援学校中学部における授業研究

①授業研究会の実施

附属特別支援学校中学部において4回の授業研究会を開催し、生徒の主体的取り組みの実現と地

域との協働に関する検討を行った。開催期日と対象授業は以下である。

- 第1回 2010年9月17日（金）：生活単元学習「あにーわ広場をきれいにしよう」(中学部全)
- 第2回 2010年10月14日（木）：作業学習「石けん班」
- 第3回 2010年12月1日（水）：作業学習「クラフト班」指導案にかかわる協議
- 第4回 2010年12月14日（火）：作業学習「クラフト班」

②授業検討会の検討視点

本研究では、授業研究会における授業者（中学部教員）及び参観者（名古屋）の授業についての発言を、「単元・題材の設定」「活動の計画」「場の設定、教材・教具」「教師のかかわり」「友達・保護者・地域の人々とのかかわり」の5つの視点で整理した。この視点は、附属特別支援学校における授業検討の視点である（岩手大学教育学部附属特別支援学校、2010）。本研究の研究目的が附属特別支援学校中学部での、「実際的な生活」における「主体的に活動する」姿の追究（岩手大学教育学部附属特別支援学校、2009）と同一であることや、本研究の研究組織が事実上附属特別支援学校中学部と一体化したこともあり、附属特別支援学校中学部での日常の実践研究との連続性を高めるために、この視点での整理を行った。整理した記録は、検討会参加者で内容を確認し、加除修正を行った上で確定した。

これらを、5つの視点による検討と併せ、生徒の主体的取り組み、地域との協働、及びE S Dの観点から考察した。

(2) 他の特別支援学校における生活単元学習等の視察・資料収集

ここでは、現実度の高い生活単元学習や作業学習を実践している全国の実践校のいくつかを筆者の一人である名古屋が訪問し、授業視察と資料収集を実施し、中学部教員に資料を回覧し、情報を共有した。

3 結果と考察

(1) 授業研究会

各研究会記録を5つの視点で整理した結果は、資料1～4の通りである。

なお、本研究における授業研究会は、附属特別支援学校中学部研究会の中で行われた。したがって、資料1～4いずれも、附属特別支援学校中学部研究会において行われた議論について、本研究に関する部分のみを抜粋整理したものである。

①第1回授業研究会（資料1）

生活単元学習「あにーわ広場をきれいにしよう」（中学部全）の研究を対象とした授業研究会である。本単元は、附属特別支援学校中庭に、中学部が設営した「あにーわ広場」を改装しようというものである。「木こりグループ」「丸太グループ」「土グループ」「壁グループ」の4グループに分かれての屋外製作活動であった。

i 5つの視点から

「単元・題材の設定」について、該当意見はなかった。改めて意見が出なかった背景的要因には、基本的に前単元の継続であり、単元設定の必然性や年間計画の中での位置づけの自然性が確認されていたことがあろう。

「活動の計画」では、前単元等で経験してきた活動をベースにした活動計画の成果が評価されている。活動を繰り返し、習熟が図られることで、活動の水準も上がっていくことが指摘されている。

「場の設定、教材・教具」では、よりよい道具の指摘も見られるが、生徒の活動を支援し、かつ効率よく進められるような場や道具の工夫がなされていることが指摘されている。

「教師のかかわり」では、教師の活動の場や役割の吟味や共に活動することの有効性が指摘されている。

「友達・保護者・地域のかかわり」では、生徒同士の協同的な取り組みが紹介された。

ii 生徒の主体的取り組みから

本単元が以前取り組んだ単元の発展であるとい

う点があるが、生徒の主体的取り組み実現の上で有効であることがさまざまな視点で指摘されている。個々の活動の継続による習熟の重要性と働く活動の日常化が働く生活への見通しや意欲につながるという両面が、背景にあり得よう。

iii 地域との協働から

本単元では、附属先行研究で形成された地域産業との連携の日常化が認められた。間伐材の利用や、塗装業者からの塗料譲り受けなどがそれである。

iv ESDの観点から

校地の生徒自身による管理は、身近な日常におけるESD活動として評価されている。地域の業者から残り物のペンキをもらい受けたり、残土を再生し、花壇用土に再利用したりするなど環境教育の観点から評価できる。

②第2回授業研究会（資料2）

石けん班における「あにわ祭（学校祭）」での販売に向けての授業を対象とした授業研究会である。石けん班では、1～3年生の縦割り編制で、食品の残物を材料に加え、環境に優しいエコ石けん作りに取り組んでいる。

i 5つの視点から

「単元・題材の設定」では、学校祭に向けての販売と、日常的な生産・販売という二つの見通しについて意見が述べられている。いずれも地域における生産・販売活動であるという点で共通する見通しである。学校祭はとりわけ、地域住民も楽しみにするイベントであり、生徒が地域の中で活動する好機でもある。そのことが作業学習の見通しになっていることは、地域に根ざした作業学習という観点から望ましいと考えられる。

「活動の計画」では、これまでの生徒の活動を準備や販売にまで広げていくことが述べられているが、そのことにより、より生徒主体の活動を目指していると考えられる。従来教師が行っていた活動を生徒と共に行う意図も同様のものである。

「場の設定、教材・教具」では、たとえば充填作業ではより取り組みやすいという観点から意見が出されているが、一方で、現在の設定でも一定

の成果があることと繰り返し取り組む過程で習熟が認められることなども指摘されている。取り組みやすくするための工夫と生徒自らの見通しや習熟を大切にする視点はいずれも重要であり、生徒主体の作業学習を考える場合、示唆に富む議論であろう。

製品置き場を工夫し出来高を確認しやすくすることや、場の配置でお互いの仕事を見やすくする対応は、活動への見通しや意欲につながる支援である。

「教師のかかわり」では、教師が生徒と共に活動することで、活動の見本となること、また生徒と教師の一体感などが指摘されている。生徒主体を技術面、精神面いずれからも支える上で、教師の協働的なかかわりの重要性が伺える。

「友達・保護者・地域のかかわり」では、共に活動する他の生徒の存在がより意欲的な活動につながることを指摘された。

ii 生徒の主体的取り組みから

販売を目指す等、作業活動に見通しがもてていることが作業活動をより主体的に展開する上で重要であることが指摘されている。

一定の流れや道具の使用を繰り返している作業活動であり、そのことが生徒の見通しや習熟につながっていることがいくつかの発言から示された。

教師、生徒が共に活動することで、それぞれにお互いを刺激し合い、より意欲的な活動になっていったことも示唆される。

iii 地域との協働から

販売活動を展開すること自体が、地域の存在なくしては成立しないものである。継続的に販売に取り組むことで、地域に根ざした作業学習が実現できていることは、実際の職業教育の観点からも望ましい。学校祭は、地域住民と児童生徒が一堂に会する貴重な機会でもあり、そのような活動を授業計画に位置付けることも重要であろう。

iv ESDの観点から

本作業班の石けん材料も日常の廃品を利用したものであり、いわゆるエコ石けんとして、活動自

体がESDの観点に即したものと言える、エコ石けんは購入者にもよく知られており、学校のみならず地域に環境教育を問いかける意義も指摘できる。

③第3回授業研究会（資料3）

クラフト班における年度末の販売会を目指した授業を対象とした授業研究会である。なお今回は授業そのものではなく、指導案検討が行われた。実際の授業展開は第4回授業研究会で行われた。クラフト班では、1～3年生の縦割り編制で、地域の果樹等の剪定材を利用した鉢カバー作りに流れ作業で取り組んでいる。

i 5つの視点から

今回の研究会は、授業そのものの検討ではなく指導案検討であったため、授業における対応だけでなく、事前の計画にあたる「活動の計画」で多くの意見が出された。

「単元・題材の設定」では、作業納会につながる単元であることを期待感につなげる展開の必要性が指摘されている。

「活動の計画」では、授業における目標、生徒一人ひとりの個別の目標をどのように設定するかが議論されている。個別の目標と全体の目標を連続的に捉える指摘も見られる。また、単元を重ねていく過程での生徒の変化を踏まえた支援に関する意見もある。

「場の設定、教材・教具」では、単元計画の中で教材・教具をどの範囲で位置付けるかの論点が見られる。

「教師のかかわり」には該当意見はなかった。

「友達・保護者・地域のかかわり」では、作業中の友達とのかかわり、購入者（地域住民）とのかかわり、それぞれの観定の必要性が述べられている。

ii 生徒の主体的取り組みから

作業納会という見通しや、慣れ取り組んできた自分の役割などが、生徒主体を支援する手立てとして指摘されている。

iii 地域との協働から

販売活動が地域とのかかわりになることがここ

でも指摘されている。

iv ESDの観点から
特に指摘はなかった。

④第4回授業研究会（資料4）

クラフト班における年度末の販売会を目指した授業を対象とした授業研究会である。第3回授業研究会で検討した指導案に基づいて授業展開された。

i 5つの視点から

「単元・題材の設定」では、単元名が生徒の活動にインパクトを与えるという指摘が見られる。1年間を締めくくる校外販売会は、これまでの取り組みの振り返り、活動へのやりがいにつながるという側面が読み取れる。

「活動の計画」では、自然な流れでの作業展開のスムーズさが指摘されている。流れだけでなく、各工程のできる状況づくりの成果がスムーズさを担保しているとの指摘もあった。作業開始時の見通しにつながる声かけ等の有効性が指摘されているが、生徒主体での展開を期待する意見もあった。作業学習の時間だけでなく、他の授業時間も関連づけて組織的に活動を展開する重要性の指摘も見られた。

「場の設定、教材・教具」では、個々の既存の道具に対する補助具の有効性が多く指摘されている。その一方でこれら補助的な対応を充実することでより手際よい作業が展開できるという指摘もある。場の配置や材料の量なども議論されているが、この作業は流れ作業で展開していることから、これらのことが重要な課題となると見られる。

「教師のかかわり」では、教師による直接的な支援の必要な生徒への対応のあり方が議論されている。また、教室内での教師の位置の検討もなされており、教師がどの位置に立つかが、支援として重要であることが示唆される。

「友達・保護者・地域のかかわり」では、協働的な場の中で、友達同士の配慮がなされていることや、地域と密着した作業展開の有効性が指摘されている。

ii 生徒の主体的取り組みから

年度最後の作業学習の単元であり、これまでの支援の手立ての成果が生徒主体の取り組みに反映した安定感のある取り組みがあった。締めくくりを意識した販売会の設定も意欲的な取り組みにつながるという点で効果的であった。習熟した活動はいっそうスムーズな作業展開を実現した。一定の活動の積み重ねとその過程での教材等の改善の重要性が改めて伺われた。

iii 地域との協働から

校外で販売会をすることで、地域商店街や地域住民とのつながりが生徒にとっても大きくなる。作業学習の中で自然にかつ日常的に地域生活に参画できることは、地域に根ざした職業教育の観点からも有効であろう。

iv ESDの観点から

本研究会では特にこの点での指摘はなかったが、教材・教具の観点から出された種々の意見は、失敗の少ない製品作りを指向するものであり、その点では失敗品を無駄に出さないというごく当たり前の発想が日常的な環境教育につながることも見られよう。また、作業環境における吸塵の議論などは、望ましい環境での活動遂行の必要性を自ずと含意しているとも言える。

(2) 他校の視察・資料収集

①視察・資料収集結果

視察および資料収集を行った特別支援学校等は、県外6校（山形県2、長野県、石川県、熊本県、佐賀県）であった。佐賀県は知的障害・肢体不自由特別支援学校、石川県は小学校特別支援学級（知的障害、肢体不自由、自閉症・情緒障害）、他の4校はいずれも知的障害特別支援学校である。

本研究で初めて参観を行った石川県特別支援学級では、エコキャップ回収を展開していた。特別支援学級が中心となって全校児童や教職員に働きかけ、大量のエコキャップを回収する活動に取り組む児童の意欲的な姿が印象的であった。学校には様々な環境問題に関する素材がある。それらを子どもたちが自ら活動の主体となって展開していくことができれば、より実際的な環境教育になる

し、実生活に即した取り組みとしても期待できる。

山形県、熊本県、佐賀県の特別支援学校は、いずれも前次研究（名古屋、名須川、中館、熊谷、岩淵、今井、田村、田淵、竹野、金丸、2011）でも参観させていただくことができた学校である。活動展開は今年度も基本的に同じ流れであり、地域に根ざした作業学習が展開されていた。いずれの学校も障害の重度化に伴い、より支援の必要な生徒への対応を活動の選択、道具・補助具、場の設定、教師の支援などによって行っていた。この点では、附属特別支援学校中学部においても課題とされていることである。

佐賀県の特別支援学校では、従来より質の高い製品作りが行われていたが、郊外店舗での販売等にもいっそう力を注いでいた。作業学習発展の一つの定式を確認することができた。

長野県の特別支援学校では、県産材を用いた木工が行われていた。県の林業関係者の助言も受けながらの展開であり、本研究の課題意識と共通する取り組みであった。

いずれの場合も、販売会等の生活的な目標を明確に掲げ、活動を繰り返していく展開であった。

4 総合考察

本研究で目的とした、生徒の主体的取り組みを実現し、かつ地域と協働する持続可能な開発に資する職業教育の展開方法という点から考察する。

(1) 主体的取り組み

本研究では、第1回授業研究会を除いて、すべてが作業学習を対象とした。二つの作業班を対象としたが、主体的取り組みの実現という観点からは、共通することとして以下の2点が指摘できよう。

一つには、販売等の明確な目標設定である。作業活動を遂行するにあたって単なるものづくりではなく、地域での販売を目指して取り組む展開は、生徒にも教師にもやりがいと手応えのある取り組みとなっている。さらには、製作活動だけでなく販売会等まで活動を拡大し、これら一連の活動を

自然なまとまりの中で展開できることは、より実際的な職業教育の観点からも望ましい。

もう一つは、活動の日常化である。授業研究会の検討では、活動の習熟が成果として指摘されたが、これは日々一定の活動を繰り返していく過程で獲得されるものであろう。ただ繰り返すのではなく、様々な支援の改善を行い、生徒が自分から・自分で取り組める状況下での繰り返しであるため、よりよく力の習熟が図られる。そのような好条件下での活動の繰り返しは、働く生活の日常化につながり、より確かな見通しと共に、個々の活動をより主体的に取り組むことにもつながる。

第1回授業研究会で採り上げた生活単元学習においても、上記2点は、前単元の継続・発展ということからの、明確な目標設定、活動の繰り返しなど、同様の成果が報告されている。県外の学校の授業でも同様の取り組みが認められた。

(2) 地域との協働

作業学習においては、地域との協働なくしては授業が成立しないと言っても過言ではないほど、日常的な営みとなっていることが指摘できる。

当たり前のように校外で販売会を行っているが、販売会開催には地域の理解が不可欠である。特に商店街や大型店との協働を考える場合は、製品等の質が高くなければ、そもそも販売会が許可されないことも珍しいことではない。日常的な地域とのかかわり、さらには製品等の質の向上を目指した授業作りの蓄積が不可欠である。製品等の質の向上は、生徒一人ひとりの活動の質の高まりによって担保される。一人ひとりが主体的に生き生きと取り組めれば、自ずと製品等の質も高まっていくであろう。そのための支援が授業においては不断に求められる。

とりわけ生産的な職業教育の場では、地域との協働を特別なことと見るのではなく、持続可能な活動として日常化していくことが望ましいと言える。

(3) 持続可能な開発に資する職業教育

本研究で対象とした1つの生活単元学習、2つ

の作業学習、いずれも環境に配慮した材料の使用にこだわった授業展開であった。生活単元学習も作業学習も、知的障害教育においては授業時数を多くとり、かつ日々継続される学習活動である。それらの授業の中で、環境への配慮が日常化すれば、それは生徒の生活様式での日常化にも反映しやすくなる。単なるイベント的な環境教育とは異なる実のある成果が期待できる。その観点から、生活単元学習や作業学習が有している実生活との連続性が、環境教育に資する側面は大きい。また、なるべく失敗品や不良品を出さないという作業姿勢は、それ自体が持続可能な開発に資する環境教育であり職業教育である。生活単元学習や作業学習の本質の中に、今日的な課題への対応の方途が見いだされるのではないだろうか。

文献

- 岩手大学教育学部附属特別支援学校 (2009)：研究紀要20. 岩手大学教育学部附属特別支援学校, pp. 総3 - 総4, 中1 - 中5.
- 岩手大学教育学部附属特別支援学校 (2010)：平成22年度第3回全校研究会資料. 岩手大学教育学部附属特別支援学校.
- 菊地一文他 (2010)：今日をおもいきり楽しみ、明日を拓くキャリア教育. 特別支援教育研究, No.638, pp. 1 - 28.
- 菊地一文他 (2011)：雇用する側に聞いてきました その就労支援何が足りない？. 実践障害児教育, Vol.453, pp. 1 - 17.
- 明官茂他 (2010)：働くことを体感しよう！清掃技能検定をとおしたキャリア教育の実践. 実践障害児教育, Vol.448, pp. 1 - 15.
- 望月徳生 (2010)：中学校特別支援学級と「総合的な学習の時間」でのキャリア教育. 特別支援教育研究, No.638, pp.11 - 13.
- 名古屋恒彦 (1996)：知的障害教育方法史生活中心教育戦後50年. 大揚社, pp.70 - 79.
- 名古屋恒彦、稲邊宣彦、田淵健、大嶋美奈子 (2009)：知的障害特別支援学校中学部における地域産業と連携した職業教育に関する研究.

岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第8号, pp.161 - 171.

名古屋恒彦・稲邊宣彦・田村英子・田淵健 (2008)：知的障害特別支援学校中学部における職業教育の充実のあり方に関する研究. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第7号, pp.175 - 182.

名古屋恒彦・名須川美智子・田淵健・田村英子・岩井雅俊 (2010)：知的障害特別支援学校中学部における地域社会・産業と連携した職業教育に関する研究. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第9号, pp.85 - 96.

名古屋恒彦・名須川美智子・中館崇裕・熊谷佳展・岩渕昌文・今井真実・田村英子・田淵健・竹野郁子・金丸温 (2011)：知的障害特別支援学校中学部における地域の産業・専門家と連携した職業教育の研究. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第10号, pp.85 - 93.

恒川弘行 (2010)：特別支援学校小学部の「キャリア教育」に結びつく「遊びの指導」. 特別支援教育研究, No.638, pp. 8 - 10.

【資料1】第1回授業研究会記録

①単元・題材の設定

- ・該当意見なし。

②活動の計画

- ・剪定作業は以前の単元で取り組んだ生徒があり、自分で判断して進めており手際よい（木こりグループ）。
- ・剪定材の切断は、クラフト作業で同種の活動をした生徒が担当で手際がよい（木こりグループ）。
- ・校内樹木の生徒による管理、剪定材の一部のクラフト班作業への転用はESDの観点からよい（木こりグループ）。
- ・皮むき作業担当生徒は経験者であり、黙々

と手を休めず取り組んでいる（丸太グループ）。

- 以前に生活単元学習でのいちご畑づくり、ミニショップなかま横の花壇づくりで土掘りを経験しており、土を掘ってふるいにかける手順がわかっている（土グループ）。
- 掘った土と堆肥（自分たちで作ったもの）を混ぜ、花壇の土として戻したことは土の再利用となり、よい（土グループ）。

③場の設定、教材・教具

- 土を花壇に入れる作業、土置き場、花壇の動線が無駄なくストレートで自分から自分で動ける（土グループ）。
- 台車での運搬。高さとし身長が合っていて、動きがつくりやすい。持続性が増している（土グループ）。
- プラバケツは弱い（土グループ）。
- 屋外の塗装は足場が安定しないが、底面積を広くした台の使用で安定（壁グループ）。
- 塗装では、業者からもらい受けた塗料も使い、経済的（壁グループ）。
- 剪定材の切断では作業台の高さ、鋸の当て方適切。生木ゆえ難しさも（木こりグループ）。
- 皮むき作業では、以前の単元の経験を生かし、スクレイパーの扱いなども工夫している（丸太グループ）。
- 磨きは角度をつけて紙ヤスリが当たりやすくなっている。時間のかかる仕事であり、安定した姿勢が効果的のよう（丸太グループ）。
- 演習林の間伐材、校内の間伐材を花壇の囲みに活用はESDの観点からよい（丸太グループ）。

④教師のかかわり

- 教師の配置（花壇、土置き場、運ぶ担当支援）と効果的に分担されている（土グループ）。
- 前日までと違う作業だが、置き場を示す、共に運ぶなどの教師の支援で動きができた（壁グループ）。

- 磨きは「どこまで」という目安がわかりにくいため、教師がそばで仕事をしながら確認している（丸太グループ）

⑤友達・保護者・地域のかかわり

- 木レンガで作った倉庫の壁塗装。塗装のため、倉庫内の物品を運ぶ作業では生徒同士声を掛け合いながら進めていた（壁グループ）。

【資料2】第2回授業研究会記録

①単元・題材の設定

- 何に向かって作業しているのか生徒が分かっているか気になっていたが、3年生の生徒は「あにわ祭」とすぐに答えられていた。将来設計の能力である。周りにあにわ祭の掲示が貼ってなかったが、生徒は意識していた。
- 授業始めにみんなであにわ祭で売れることを確認している。ワゴン販売の売れ行きも毎時間チェックして意欲付けにしている。
- あにわ祭とワゴン販売の2つの目的があっても良い。授業中の先生の声掛けもあにわ祭に向かっていった。出来高表やポスターがあっても良いのでは。
- 石けん作りには2種類の方法がある。生地から作っていく石けん作業は、生地を寝かして時間をおかないと製品化できず、見通しがもちづらい。石けんの素を活用しての作業は取り組みやすいが、石けん加工作業と言うべきか。本校の場合は生地から作る作業であるが、充填して作業を完了してから生地を寝かすので、活動が完結し見通しにつながる。エコ石けんであり、お客さんが認めている。これが石けん班の売りの部分ではないか。

②活動の計画

- 販売準備をする前から販売の意識ができていた。
- 石けんの素づくりも生徒と教師で行うようにしている。みんなが容器詰めしている時

に作っている。

③場の設定、教材・教具

- 充填の作業は、ロスが出たり溢れるのが気になる。たらいの中で詰めてはどうか。陶芸作業で見かけるが、タンクの下に蛇口が出ている物を使用してはどうか。ポンプの容器詰めは良い。
- 充填作業では、上だけではなく容器も見られるようになってきたので、溢れる量も減ってきた。適量のみて作業をするのは調理にも通じる。台があって適量を見るのも大事。
- 生徒がすでに動きが分かっているので、充填作業の手順を変更するとリスクもある。
- 製品の置き場が、できあがりを確認できる配置で良かった。
- 攪拌以外でもお互いが見える作業場が良い。
- ラベル貼りの生徒の作業スピードが速いので、ラベル貼りのボトルが足りなくなってきたら、容器詰めの人数を増やすなど、活動のペース調整をしている。
- 容器詰めは蓋置きはすばらしい。シールを貼るものだったが、なるほどなという感じ。
- 蓋しめでは、一人で蓋ができるようになってきた。ゴム手袋したままでできるようになるとは思わなかった。
- 場の設定で他の生徒の様子から自分が刺激を受けることも可能になっている。生徒によってキャリア発達の能力が変わってくる。これにとらわれずにやっていた方が良いのでは。
- あにわ祭のポスター作りも生徒によってはパソコンで作成すれば情報活用能力になる。
- 換気が何とかならないか。生徒によっては心疾患があるので、注意が必要。以前攪拌時にビニール袋を使用していたが、それを使って苛性ソーダの刺激を軽減した方が良いのでは。

④教師のかかわり

- 攪拌の二人の生徒の棒の回し方は担当教師とそっくり。教師が見本になっている。
- 一緒にやっているから息づかいが分かり、一体感が生まれ、見ていて気持ちが良い。
- あにわ祭を意識しているのかが心配だったが、作業学習とはいえ製品を作っているので仕上がりを意識した方が良い。石けんは良い仕上がりを判断するのが難しい。

⑤友達・保護者・地域のかかわり

- 教師による仕事の確認が必要な生徒がいたが、他の生徒の作業の様子を見て刺激を受け、自立してきた。自分自身も振り返りながらできている。

【資料3】第3回授業研究会記録

①単元・題材の設定

- 日程計画で、作業が始まる前に作業納会のオリエンテーションを行い、生徒が納会有一些ことを知り、期待感をもって作業に取り組めるようにしたい。

②活動の計画

- 個別の目標については、出来栄や丁寧さを入れてはどうか。
- 本時の目標で目標が鉢カバーの個数となっている。直接鉢カバーの組み立てを行っていない生徒も自分の行っている作業が鉢カバーを作ることに欠かせない作業であることを分かってほしい。また、作っている生徒だけでなく、みんなが目標を意識できるようにしたい。
- 生徒の作業への取り組み方が変わってきている。また、作業の質や製品の質も変わってきている。変わるための支援、どのように変わってきたのかを入れたほうが良い。

③場の設定、教材・教具

- 単元の計画の教材・教具については作業で使う教材・教具も入れる。

④教師のかかわり

- 該当意見なし。

⑤友達・保護者・地域のかかわり

- 友達等とのかかわりは友達・保護者・地域の人とのかかわりである。また、買ってもらう人とのかかわりを入れる。

【資料4】第4回授業研究会記録

①単元・題材の設定

- 単元名はインパクトあり、わかりやすい。目標数が単元名に入っていればよいかもしれない。
- 作業学習の1年間の締めくくりとして、校外での販売会をテーマにした単元設定は、働いてきたことの意味ややりがいを感じる良い機会となったのではないかと思われる。

②活動の計画

- 来た人から準備し、持ち場に着く流れスムーズであった。
- 最初の目標確認、わかる人への支援、全体の志気への支援、意欲や見通しにつながる場面。さらっとやるのはよいが、班長中心でできないか。準備と話を区切らずに自然にできればよいとも考えられる。
- 終わりも班長で進められないか。さらっとして適切であった。
- 各工程ブレーキなくスムーズであった。一人ひとりにできる状況があったことが、全体としての勢いにつながった。
- 販売会場へのあいさつ等、生徒たちが前に出て行っていけばなおよいのではないか。
- 販売会場へのあいさつは1年生が行ったが、作業班代表、あるいは上級生が良かったのかもしれない。
- ちらし配りなど、おもしろ学習の時間に急ぎよ行ったが、単元期間としてもう少し長く設定できれば、様々な活動に生徒が主となって活動することができたと思われる。

③場の設定、教材・教具

- ケーブルの始末、床が歩きにくいので上からつるせないか。

- 掲示はテーマを意識しやすい。日々の見通しにつながるように出来高表をもっと大きくしてもよいか。生徒と作る掲示もあってよいのでは。
- 枝切りのA君は長さの目安を机の縁でしている。これでよいなら見本は不要ではないか。よい手際であった。
- B君は時々吸塵できるよう掃除機を。場の汚れは効率低下につながるのでは。
- B君のほぞ切り、ゴミ袋を切る場所が真ん中にくるようにすればよりスムーズではないか。
- Cさんのベルトサンダー。一定のペースであればタイマーは有効であった。平滑面を補助具で確保しているので安定してできる。両端の磨き残しをどうするか。平滑面を広げて木を上端から下端まで動かす流れにしてはどうか（特に手前が狭い）。
- D君のボール盤操作は安定した仕事ぶりであった。
- E君のボール盤は高さよく安定した仕事ぶりであった。目印も効いている。ハンドルを奥まで押し込むのが少しつらそうである。もう少し手前で終えられるよう調整できるか。吸塵効いていない。二つの仕事もスムーズに流れていた。
- E君、F君の組立ボンド付け補助具は扱いやすく、ボンドのつけすぎを解消した。板の部分を見やすくアクリル板ではどうか。
- 底板の厚みをできるだけ揃えられないか。底板工程の作業の進めやすさを考慮して。
- 枝の供給量は適切か。枝が多すぎるようにも思える。
- 鉢カバーとしては丈が低い。
- 工程の流れ、D君の位置がもう少しCさんに近くてもよい。枝と底板の各工程が最終的に組立に収斂するように。
- 教材・教具の工夫、アイデアによってはD君が一人で自立的に作業をする時間が作れたかもしれない。

④教師のかかわり

- D君への支援は側で教師が仕事を進めるのは適切であった。仕事量が $1 + 1 = 1$ にならないようにできるだけ努めたいが、D君の今のよい姿（自分から、継続して取り組んでいる姿）と不定型材であることを考えれば、現状適切であると考ええる。改善案として、たとえば可塑性のあるウレタンなどで枠を作り、それを板に張った補助具をいくつかサイズを違えて用意する。その補助具に材をはめ、広めの安定した台の上で時々移動を教師が行い（スライド式）、その間別の仕事をするとかあり得ないか。
- T3の位置は、E君の支援には距離があった。作業机を小さくして対面でやれないか
- 教師の話を生徒が聞く、という場面においては、生徒の受け身な態度、または話の内容を理解することが難しい生徒もみられた。導入時や最後のまとめの場面等、できるだけ生徒が参加、活動できるような工夫が必要である。

⑤友達・保護者・地域のかかわり

- 材の運搬や作業場の移動等に他の友達のじゃまにならないように配慮している姿に一体感を感じる。
- 地域の材を利用したり、地域で販売会を開催したりなど生徒にとって身近で親しみやすい取り組みであろうと考えられる。
- 流れ作業であるので、次の工程へと材料を移す、という活動も教師が行うのではなく生徒同士が自然に行えるようにすれば、友達の働きぶりを意識したり、自分の役割に責任を感じたりすることができたのではないか。